

平成 25 年度 受賞者

高円宮殿下記念地域伝統芸能賞

御陣乗太鼓保存会（石川県輪島市）

地域伝統芸能大賞 保存継承賞（第 1 類）：地域伝統芸能の実演に係わる団体又は個人

雄勝法印神楽保存会（宮城県石巻市）

地域伝統芸能大賞 活用賞（第 2 類）：地域伝統芸能を活用した行事の実施主体

かんこ踊保存会（石川県白山市）

地域伝統芸能大賞 支援賞（第 3 類）：衣装、用具等の製作、人材等の確保に係わる団体又は個人

石川 千秋（秋田県男鹿市）

地域伝統芸能大賞 地域振興賞（第 4 類）：その他特に顕著な貢献のあったもの

勝山左義長まつり実行委員会（福井県勝山市）

地域伝統芸能奨励賞

川畑 さおり（鹿児島県大島郡喜界町）

受賞者 プロフィール

高円宮殿下記念地域伝統芸能賞

御陣乗太鼓保存会（石川県輪島市）



御陣乗太鼓は石川県輪島市名舟町に古くから伝わる太鼓で、天正 4 年（1576 年）、上杉謙信の能登攻略のとき、古老の一計で、奇妙な面を付け、陣太鼓を打ち鳴らし上杉軍に奇襲をかけ敗走させたのが始まりといわれる。各地の太鼓に比べ、リズム所作等がかもしたず異様な雰囲気には一種独特な迫力がある。また、地元の子供たちは週 2 回、大人は毎晩太鼓の練習をしており、御陣乗太鼓が打ち手だけのものではなく、名舟町全体のものであることもこの太鼓の特徴となっている。

伝統的な技能を伝承しつつ、個性的な、見得や奇声などを加え、歴史を重ね、今日では能登を代表する芸能として認識されるに至っており、昭和 38 年には石川県無形文化財に指定されている。

御陣乗太鼓は名舟大祭（7 月 31 日～8 月 1 日）で打ち続けられてきたが、現在は、輪島市内や能登地域の旅館をはじめ、県外や国外でも数多く演じられるようになっており、名舟町はもとより、能登や輪島の親善大使としての役割を担っている。

保存会は、伝承及び保存のための活動を広げ、過疎化が進み活力減衰傾向にある能登や輪島の魅力を発信する担い手として、観光や地域振興に非常に大きな貢献をしている。

地域伝統芸能大賞 保存継承賞（第 1 類）：地域伝統芸能の実演に係わる団体又は個人

雄勝法印神楽保存会（宮城県石巻市）



雄勝法印神楽は 600 年以上もの古い歴史があり、長年地域の伝統芸能を舞い伝えてきた。羽黒派系と言われ、優雅で荒々しい、静と動を折り込んだ演技で、舞型等に修験色の古風さを残し、つかの間、現世を離れた感を覚えさせる。

保存会は、こうした神楽の保存継承に努め、毎年、町内各神社の祭典、各種イベント等に年間 20 回近く出演し、町内外から多くの観客を集めている。また特別養護老人ホームをボランティアで訪問するなど多岐にわたる活動を行っている。

一方、雄勝町を代表とする団体として他所のイベントにも積極的に参加し、雄勝町を大きく PR し、観光及び地域の商工業の振興にも大きく貢献してきた。

なお、平成 23 年 3 月 11 日の東日本大震災では、雄勝町もまた甚大な被害を受けた。死者、行方不明者は町の総人口の 5% を超え、雄勝法印神楽保存会の高橋仁夫会長も津波の犠牲になった。舞台も、伝統のお面、衣装もほとんど流失してしまった。

震災後、保存会のメンバーは、「復興した時に、伝承文化が消えてしまっていてはいけない」との思いと、避難所の人々から上がる「神楽を見たい」という声に応えたいとの思いから、23 年 5 月下旬の「おがつ復興市」を初めとして各地で神楽を奉納し、地元の復興を目指して努力を行っている。

かんこ踊保存会（石川県白山市）

白峰のかんこ踊は白山山麓の白峰地区に伝わる古い踊りで、曲調は荘厳、白山の気高さを感じさせるものである。その起源については、養老元年（717年）6月18日、泰澄大師の白山開山を迎えにいった地元の人々が、彼の帰還をよるこんで、カンコ（蚊遣火）をふり踊りまわったという伝承が残されている。名称の由来については諸説あるが、カンコと呼ばれる羯鼓（かっこ）ふうの太鼓に合わせて踊るからと説が現在では有力と考えられている。もとは白山登山口の市ノ瀬地区を中心に伝承され、白山開山の日ははじめ節供・盆・祭りなどに唄い踊られたものが、白峰地区全域に広まったと言われている。

今日では、7月に「白山まつり」として開催され、地元の子どもからお年寄り、更には観光客からも混ざり踊る。踊りの輪にカンコ打ちが加わり、美しい歌詞、かん高いカンコの響き、囃子詞（はやしことば）が相まって、観衆を魅了する。

保存会では、子どもたちに踊りを指導し、踊りを受け継ぐとともに、人口の減少により途絶えていた踊り流しを復活させるなど、祭りを盛り上げて、観光振興と地域の賑わいに大いに貢献している。

石川 千秋（秋田県男鹿市）

男鹿の伝統芸能である「ナマハゲ」は各集落で行われている民俗行事であり、昭和53年に国重要無形民俗文化財に指定されている。市内約60の地区で多種多様なナマハゲの面や衣装を使用している。

本来は統一された面は存在しないが、現在観光イベントやナマハゲ太鼓、グッズなどで知られるナマハゲの面は木彫りで作られており、現在木彫りを行っているのは石川氏しかない。

ナマハゲは古くから地域に根付いた伝統行事であることから、その衣装（ナマハゲ面）は集落の貴重な財産として、集落外に持ち出すことは容易ではなく、観光イベントなど地域の振興事業に活用することは難しかった。そうした中で、石川氏は親子2代にわたり男鹿半島の民俗行事でもある「ナマハゲ」の木彫り面の製造を続け、2代目として25年にわたり各種の用途、事業にナマハゲ面を提供し、伝統的な民俗行事「男鹿のナマハゲ」の普及宣伝に貢献してきた。

ナマハゲは男鹿の観光を語る時に欠かすことのできない重要な観光資源であり、今後も、男鹿市の観光・商工業の振興には必要不可欠である。ナマハゲ面の木彫り技術を受け継ぐ石川千秋さんは、観光・商工業の振興に顕著な貢献をしている。

勝山左義長まつり実行委員会（福井県勝山市）

左義長は古く平安期の頃から正月15日に行われた行事の一つとして、全国各地で行われている小正月の火祭りである。現在、勝山左義長まつりは、毎年2月の最終土曜日と日曜日の両日に開催され、300年以上の歴史と伝統を持ち、奥越地方に春を呼ぶ奇祭として知られている。市街各町内の辻つじには、総檜で入母屋造りの豪華な櫓が建ち並び、その2階舞台では、三味線・笛・鉦の軽快なテンポに合わせて、女装した男性が太鼓を叩き踊る。この光景を地元では「浮く」と言っているが、この様は全国においても「勝山左義長」だけといわれており、市外や県外からの観光客の目を楽しませてくれる。

勝山左義長まつりは10万人を超える（平成23年、24年：12万人）来場者があり、勝山市の人口の5倍に近い観光客を集客しており、地域の振興に大いに貢献している。

川畑 さおり（鹿児島県大島郡喜界町）

鹿児島本土から南に約300キロ、奄美諸島のひとつに数えられる喜界島は外界離島の町で、亜熱帯の気候と風土は本土とは大きく異にし、同様に歴史や文化も特異である。その中でも奄美島唄は裏声を使って哀調を帯び、その旋律は独特である。その伝統芸能を9歳の時から学んだ氏は、恵まれた天賦の才でメキメキと実力をつけ、鹿児島県民謡王座決定戦での優勝や全九州民謡民舞の祭典グランプリ、平成22年民謡民舞全国大会内閣総理大臣杯優秀賞受賞、平成24年度日本民謡ヤングフェスティバル全国大会グランプリ受賞等数々の賞を受賞している。今では奄美島唄の若手第一人者としての評価も定着している一方で、島内外の各種イベントに出演して島唄の普及活動に関わっている。

小・中学校での授業での児童生徒への指導や家庭教育学級さらには高齢者学級での講師など、島内の生活に深く刻み込まれた奄美島唄の後継者育成や伝承活動にも積極的に関わり、喜界町のみならず奄美群島の文化振興に大きく寄与している。また文化庁が推進する「奄美島唄保存伝承事業」に、各関係行政機関や学者、研究者等とともに若手唄者代表委員として名を連ね、奄美島唄の適切な保存事業に取り組んでいる。